ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報

No.1641
2017年11月号

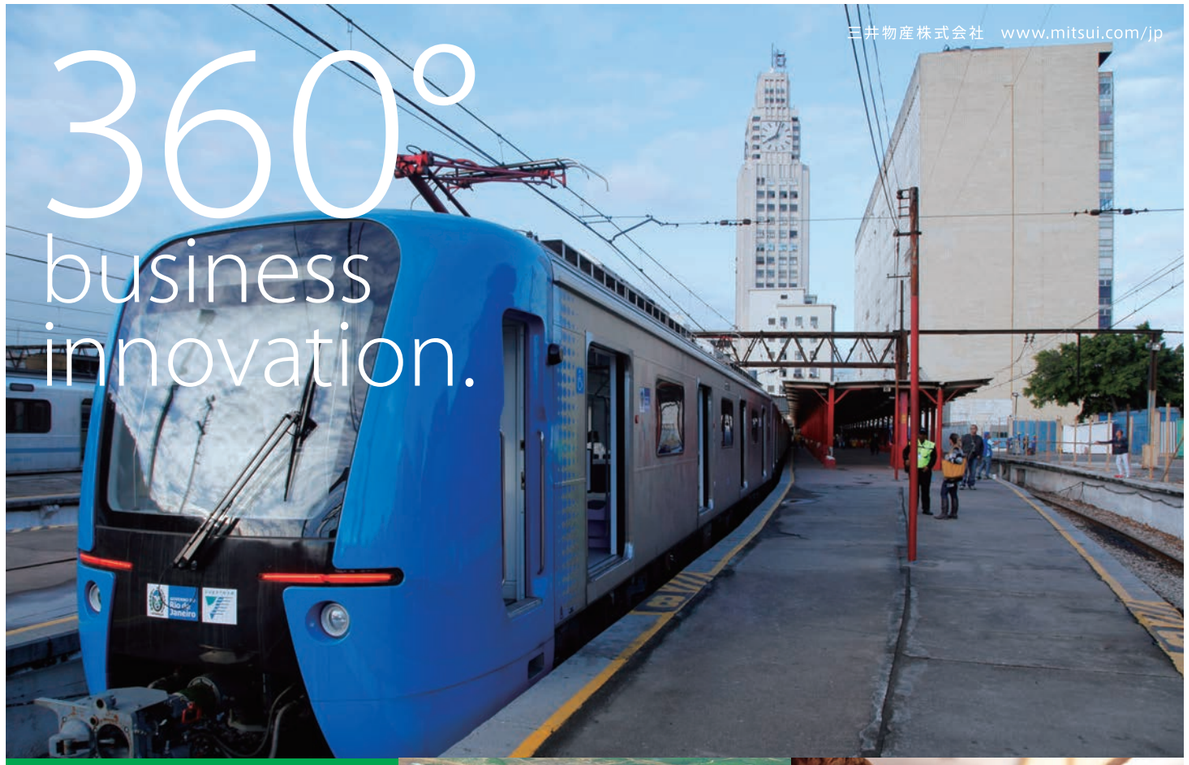
特集
マンガ＆アニメ

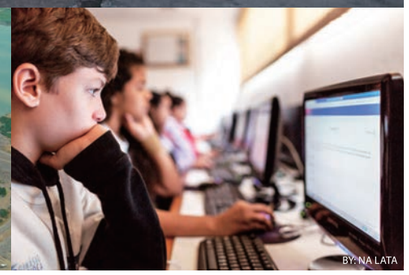
- ブラジルマンガはブラジル的に面白いか？
  私的ブラジルマンガ小史
- ブラジルにおける日本マンガ受容史
  日系人がブラジルで読んだマンガ
- ブラジルのアニメ映画界をリードする
  アリ・アブレウ監督インタビュー

あの町この町
ブラジリア

0円

一般社団法人 日本ブラジル中央協会
URL http://nipo-brasil.org/ E-mail info@nipo-brasil.org
〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館５階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁





世界の未来を、ブラジルとつくる。

［Business innovation-1］

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。

オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

［Business innovation-2］

水力発電事業により、CO_2排出の少ないエネルギー開発を推進。

川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

［Business innovation-3］

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。

オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.

目　次

（あの町この町）
ブラジリア［奥田若菜］…… 3

（ブラジル・ナウ）
明治大学ラテンアメリカプロジェクト 中核としての日伯交流
［中林真理子］…… 5

【特集】マンガ＆アニメ
ブラジルマンガはブラジル的に面白いか？
私的ブラジルマンガ小史
［川原崎隆一郎］…… 6

【特集】マンガ＆アニメ
ブラジルにおける日本マンガ受容史
日系人がブラジルで読んだマンガ
［佐藤フランシスコ紀行］…… 8

【特集】マンガ＆アニメ
ブラジルのアニメ映画界をリードする
アリ・アブレウ監督インタビュー［文責：編集部］… 10

第20回日本ブラジル経済合同委員会が開催［大前孝雄］… 11

連載・ブラジル現地報告
ボベスパ指数から見えるもの［永田 翼］…… 12

（日系企業シリーズ・第49回）
ブラジル三井物産
在伯グループ会社は28社：資源からインフラサービスへ
［土屋信司］…… 13

（ビジネス法務の肝）
知的財産権と職務発明制度［ホベルト・カラベト］… 14

連載★税務の勘どころ
高税率で複雑なブラジルの消費課税（その1）
［都築慎一］…… 15

（連載エッセイ）
ブラジルにバイオリンの弓工場　夢ふくらむ［岩尾陽］… 16

（ウーマン・アイ）
ブラジル日系社会を支え続ける女性たち［中平マリコ］…… 17

（ジャーナリストの旅路）
サンパウロ再び［市川亮太］…… 17

（連載文化評論）
追悼：松井太郎さん
ブラジル日系文学界屈指のストーリーテラー作家の死
［岸和田仁］…… 18

最近のブラジル政治経済事情 …… 19
新刊書紹介 …… 20
（びっくり豆知識）ブラジルに日本人の「拉致」を教えよう …… 20
協会からのお知らせ …… 21

写真家田中克佳の
「表紙のひとこと」
「アマゾン奥地のバリンチンスという小島で、毎年６月に開催される奇祭、ボイブンバ。島を二分して二つのチームで競いあい、踊りや歌、山車を通じたストリートオペラを披露する。牛を神格化して祀る、アマゾンに伝わる狂乱の祝祭だ。」
（65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com）

あの町、この町

ブラジリア

ブラジリアは、ブラジル国内で存在感のない都市かもしれない。1960年に首都となったブラジリアは、名高い建築家たちがデザインした計画都市である。ユニークな形の建築物が名物だが、その一方で「なにもない場所」「田舎首都」などと揶揄されることもある。ブラジルを訪れる外国人が足を運ぶのはサンパウロやリオデジャネイロ、北東部の州都ぐらいで、建築好きでもないかぎりブラジリアにまで足をのばす人は少ないだろう。

それでも住んでみれば、ブラジリアは意外に味わい深い都市である。飛行機の形をした中心部プラノピロットでは、建築家オスカー・ニーマイヤーやルシオ・コスタの思考に触れることができる。なぜあの時代に、新たな都市を首都として建設するに至ったのか、ブラジルの歴史に思いを巡らすこともできる。信号のない交差点が描く曲線や、広々とした場所に建つ不思議な形の建築物は目にするたびに愛着が増していく。

もちろん、しばらく過ごせば「失敗都市」といわれる理由も少しずつ分かってくる。車での移動を前提とした道路整備は徒歩や自転車での移動を困難なものにしており、車を持たない人には不便だ。建築家が「コスモポリタンな場所」となることを期待したバスターミナルは、雑然とした治安の悪い場所となっている。

ブラジリアの魅力の一つはなんといっても衛星都市だ。バスターミナルで衛星都市行きの列に並んで行ってみると、プラノピロットとは違う風景が見えてくるだろう。ある衛星都市は初期住民の多くが元ブラジリア建設労働者であるため、いまも彼らの出身地北東部と強いつながりがある。食堂では北東部の郷土料理を安い値段で味わうことができるし、行商人が北東部各地の名産品を北東部訛りで売りにくる。プラノピロットが「静」だとすれば、そこから離れた衛星都市は「動」である。にぎやかに路上を行き交う人びとや、活気のある市場で商人たちが張り上げる声。ブラジリアでは、二つの異なる雰囲気を味わうことをお勧めしたい。

奥田若菜
（神田外語大学准教授）

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。
日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR（Human Resources）情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経ＢＰ社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。

日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング（人材紹介）

エグゼクティブ、金融、ＩＴ系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアＮＥＴや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR Executive　プロフェッショナル、エグゼクティブのための転職支援サービス

20代、30代のための転職支援サービス　日経HR AGENT NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9ヵ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュラロンコーン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN RECRUITING FORUM in 東京

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体（雑誌・Web・メルマガ・フォーラム）を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。

仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ　株式会社日経HR　TEL:03-6812-7307
e-mail:webeigyo@nikkeihr.co.jp　https://www.nikkeihr.co.jp

明治大学ラテンアメリカプロジェクト
中核としての日伯交流

「ポルトガル語学科もない明治大学が何故ブラジルとの交流活動を展開するのか？」これはおそらく全ての読者に共通する疑問であろう。その答えは一言で語り切れるものではないが、ブラジル、そしてラテンアメリカにパートナーとしての大きな潜在性を感じているから、ということに尽きるだろう。明治大学では学長主導のプロジェクトとして「明治大学ラテンアメリカプロジェクト」を立ち上げ、本年 10 月 10 日に東京の駿河台キャンパスでシンポジウムを開催した。以下、本プロジェクトの概要を説明することから、明治大学とブラジルとのこれまでの交流と今後の展開について紹介する。

「時差と距離を乗り越えた学生交流」の展開

明治大学ラテンアメリカプロジェクトは明治大学の国際化におけるラテンアメリカ地域での教育研究活動の総称で、主に以下の二つの活動からなる。第一は「ラテンアメリカ異文化交流プログラム」の実践である。2009 年に商学部から始まった同プログラムでは、ラテンアメリカ地域の明治大学の協定校と、ビデオカンファレンスとフィールドトリップによる相互訪問を中心とした学生交流を行い、将来日本とラテンアメリカの国際的なネットワーク構築に貢献する人材を育成するための活動を行っている。2011 年に FAAP 大学とサンパウロ大学（サンパウロ大学は法学部間の部局間協定も締結）、さらに 2016 年にはリオブランコ大学と協力協定を締結し、サンパウロに 3 校の協定校を有することになった。そして 2011 年以来、これらの協定校との間で、日本とブラジルそれぞれへの企業訪問を含む学生のフィールドトリップを定期的に実施している。そしてさらに効果的なフィールドリップに再構築するため、国際機関、日系企業、NGO 等を通じたインターンシップ及びボランティア活動の取り入れに着手している。

「ラテンアメリカ×マンガ」の可能性

第二の活動は 2016 年から始まった「ラテンアメリカ×マンガ プロジェクト」である。マンガをツールに日本文化・日本語を継続的にラテンアメリカ地域に対して発信し、日本への造詣を深め、将来日本との懸け橋となりうる人材を輩出するための取り組みである。これまでの活動の中で、ラテンアメリカ地域における日系社会のつながりと、マンガの影響力の大きさを実感したことをきっかけに、この第二の活動が始まったが、これらの活動は、日本とラテンアメリカの懸け橋になる人材育成という長期的な目標の下でリンクしている。

マンガ専門図書館を二館有する明治大学にとってマンガはキラーコンテンツである。また、マンガの収集と保存に際して発生する莫大な複本（重複する本）をどう再活用するかは、日本全国のマンガ図書館が抱える共通の課題である。このような状況下で「次の一手」を模索している中で、サンパウロにジャパンハウスが開設されることを知った。明治大学が有するマンガを寄贈し、日本文化や日本語の普及に役立てていただく提案をし、開館に合わせてマンガを寄贈することができた。これに続き、サンパウロを中心にラテンアメリカ地域の協定校やそのほかの文化施設へのマンガの寄贈と、マンガを用いたワークショップの開催等を計画している。そしてこの取り組みが平成 29 年度文化庁メディア連携活動支援に採択されたことにより、実現への動きが加速している。

サンパウロをハブとした広域展開へ

これまでの活動をより強固にし、さらに発展させるため、明治大学は本年 5 月にはブラジル日本商工会議所との協力協定を締結した。また、明治大学の現地校友会であるブラジル紫紺会にはこれまでも学生交流等の側面的支援を受けてきているが、今後はさらに関係を強め明治大学のブラジルでの活動を共に活性化させるための準備をしている。

明治大学は現在ブラジルの他に、アルゼンチン、コロンビア、メキシコに協定校を有している。将来的にはサンパウロをハブにラテンアメリカ全域での展開を目指しており、そのための基盤づくりを進めている。また、このような教育活動に加えて研究活動での連携も強めていく。

最後に、本プロジェクトを学内で中心的に推進する私自身は、2009 年に初めてブラジルを訪問するまではラテンアメリカとは全く無縁な人生を送っていた。しかし日本の大学との連携を熱望するサンパウロの大学関係者と出会い、日系人や親日家のブラジル人を含む多方面にわたる方々の支援を受け、要所要所で信じられないような幸運な出会いに恵まれ、ここまで活動を続けることができた。明治大学のこうした取り組みが新たな日伯交流の促進につながることを願っている。

中林真理子（明治大学　学長室専門員・商学部教授）

ブラジルマンガはブラジル的に面白いか？
私的ブラジルマンガ小史

川原崎隆一郎
（月刊誌「ビンドラーマ」代表取締役）

ブラジルのマンガとは

ブラジルにおけるマンガの呼称はさまざまであるが、公の場で使用されているのは「HQ（História em quadrinhos ＝コマを使った物語といった意味）」である。ほかに「Revista em quadrinhos」、「Revistinha、Gibi（オ・グローボ紙が1939年に発行したマンガ誌の名前に由来）」といった呼称もある（revistaは雑誌の意味である）。ポルトガルでは「Banda desenhada」という。また、「mangá」という言葉もあるが、これは日本式のマンガを指す時に使われる。では、ブラジル人にとって日本式マンガとは何か、であるが、絵の描き方が違う（眼、輪郭、衣装など）、白黒である、ページを右から左に読む、など様々なことが言われているが、確固とした定義はないようだ。

風刺マンガの登場

ブラジルでマンガの前身となる風刺画（風刺漫画）が登場したのは19世紀の前半であるが、1869年にアンジェロ・アゴスチーニ Angelo Agostini が発表した『As Aventuras de Nhô Quim ou Impressões de Uma Viagem à Corte（ニョ・キンの冒険あるいは宮廷への旅の印象）』がブラジル最初のマンガ作品とされている。ちなみに、この作品が発表された1月30日は、「ブラジルマンガの日」となっている。この作品は絵の下に物語が書かれていて、現在のマンガで使われる吹き出しなどは使われていない。

ブラジルで最初のマンガ誌は『O Tico-Tico』（1905年～1957年、週刊誌）で、これはフランスのマンガ誌に倣ったものだが、ここで初めてブラジル発人気キャラがいくつか登場する（シキーニョ Chiquinho など）。1930年代には米国の人気キャラ、ミッキーマウスやポパイが本誌に登場する。当時は米国の版元からライセンスを得てブラジル人マンガ家が描いていたようだ。

1930年代になると、大手新聞各紙（オ・グローボ、ア・ガゼッタ A Gazeta など）が増刊号にマンガを掲載するようになり、それに合わせて多くのキャラクターが米国から導入された。特にヒーローものが多く導入され、日本でも有名なものとしては、ターザン（1933）、スーパーマン（1938年）、バットマン（1940年）を挙げることができる。

これらの作品は、米国から直接導入したものと、ライセンスを得てブラジルの脚本家とマンガ家が作ったものとがある。この流れはこの後もずっと続いていて、今でも書店へ行けば米国発のマンガ、特に大手二社、マーヴェル・コミックとDCコミックのものが一番目立つところに大量に並べられていて、一番スペースを取っているのである。

この時代、ブラジルのオリジナルのものも数々生み出されているが、米国のキャラの焼き直し的なものがほとんどで、独創性に欠けるようだ。

興味深いのは、かのネルソン・ロドリゲスがマンガに関わっていたことで、マンガ誌の制作のほかに、『カンタヴィルの幽霊』（ワイルド）と『オズの魔法使い』（ボーム）のマンガ版の脚本を手がけている。

1950年代にはインデイーズのマンガが登場するが、それがエロマンガであったというのは、ブラジルならではというか、大変面白い出来事である。

ジラルドとマウリシオ・デ・ソウザ

1960年代になって登場するのが、ジラルド Ziraldo（1932～）とマウリシオ・デ・ソウザ　Mauricio de Sousa（1935～）である。ブラジルを代表するマンガ家は誰かとブラジル人に尋ねれば、ほぼ間違いなく名前の挙がるのがこの二人である。

ジラルドが1960年に発表した『Turma do Pererê（ペレレと仲間たち）』は、キャラクターの創出から単独ですべてを制作した最初のマンガと言われ、当時最大の発行部数となったが、1964年の軍事クーデター後の新政権下、発行中断を余儀なくされた。シラルドの作品で最大の成功を収めたものは『O Menino Maluquinho（イカれた小僧）』で、1980年に発表され、ピークとなったのは1990年代と2000年代で、映画、テレビアニメ、劇場アニメにもなっている。

マウリシオ・デ・ソウザの代表的な作品は何といっても『Turma da Mônica（モニカと仲間たち）』（1959～）で、何世代にもまたがって人気のある国民的キャラである。昨年のリオ五輪の前に東京で行われたブラジルフェスティバルなどで着ぐるみが登場しているので、ご覧になった方もいるのではないかと思う。彼は数多くのキャラを生み出していて、いくつも列挙する余裕はないが、古くはサッカーの王様ペレとのコラボで『Turma do Pelezinho』を作り、最近ではサッカーブラジル代表のエース、ネイマールもキャラとして登場している。また、最近では思春期のモニカが登場する『Turma da Mônica Jovem』という作品があり、日本マンガの作風を取り入れている。

手塚治虫が1984年にブラジルを訪れていて、マウリシオ・デ・ソウザと共同制作の企画があったが、1989年に手塚が死去したため立ち消えとなっている。

1960年代には日系のマンガ家が何人か出てきている。日本の映画が封切り後数週間でブラジルで上映されていたらしいから、日本からマンガも入ってきていたのだろう。『鉄腕アトム（ブラジルでは Astro Boy と呼ばれている）』に着想を得たという、『Tupãzinho トゥパンジーニョ』という作品をミナミ・ケイジ Minami Keizi が作っている。

日本マンガの登場

最初に入ってきた日本のマンガは『マッハGoGoGo』（1970年代半ば）だが、アルゼンチンで制作されたものがブラジルに入ってきた。「mangá」ではないということなので、アメリカ式の作風なのだろう。

1980年代は日本の特撮ヒーローものがテレビで放送されるようになり、これをもとにしたマンガ作品が生み出された。『スペクトルマン』、『巨獣特捜ジャスピオン』、『電撃戦隊チェンジマン』、『星雲仮面マシンマン』などである。

「mangá」としてはじめてブラジルで発行されたのは1988年で、『子連れ狼』（小池一夫原作、小島剛夕画）であった。日本のマンガはこのころからポルトガル語に翻訳されて、現在まで継続的に発行されている。コマを右から左へ読み進める日本の形式になっていて、基本的に日本の単行本の半分の単位で出ている。

ブラジルのマンガは前述した1930年代から現在に至るまで、アメリカの作品をライセンス契約でブラジルで制作、アメリカの作品を翻訳して発行、アメリカの有名キャラに着想を得てブラジル人作家が創作、これらのパターンに終始しているように見受けられる。『怪傑ゾロ』だ、『スパイダーマン』だ、『超人ハルク』だ、とアメリカの有名キャラばかりが目立っている（たまに欧州のものもある）。さらに、1990年あたりからはブラジル人作家（デザイナー）たちがアメリカや欧州の仕事を引き受ける事態になっている。

ブラジルのマンガに詳しい方に怒られそうだが、前述したジラルドとマウリシオ・デ・ソウザ以外にブラジル独自のマンガ家やキャラが見受けられないようだ。

マンガ専門店（1986年開店）を覗いてみた

ところで、サンパウロ市内にマンガ専門店があると教えていただいたので、行ってみた。パウリスタ大通りの終わりの方を横丁に入ったところにある「Comix Book Shop」という店だが、思いのほか小さい店であった。そこで、最近の作品でおすすめのものをということで、2冊購入して読んでみた。

ひとつは、『Bando de Dois（二人だけの盗賊団）』（ダニロ・ベイルート Danilo Beyruth 作）。ブラジル北東部の盗賊カンガセイロを題材として西部劇風に仕上げた作品で、2011年のアンジェロ・アゴスチーニ賞を受賞している。

もうひとつは、『Dois Irmãos（ふたり兄弟）』（ガブリエル・バー Gabriel Bá、ファビオ・ムーン作 ）。ミルトン・ハトゥン Milton Hatoum の同名小説を原作とし、マンガのアカデミー賞と言われる米国のアイズナー賞を昨年（2016年）受賞している。

日本のマンガに慣れ親しんだ筆者からすると、いずれの作品も絵が細部にわたって書きこまれていて疲れてしまう（日本のマンガは省略が巧みだと思う）のと、デフォルメの仕方が悪いのかこちらが慣れていないせいのかわからないが、登場人物の区別がつかなくなってしまうことがしばしばあった。また、日本のマンガだと線をうまく使って動いている感じを出したりするのだが、そういうものが非常に少なくとても静的な感じがする。コマは常に長方形または正方形であることも関係するかもしれない。さらに、ストーリーの展開も日本のマンガと比べてとても緩慢に感じられた。

日本のマンガと欧米のマンガの違いについては夏目房之介の著作などで論じられているのでそちらをあたっていただくとして、ブラジルのマンガ家にとっては、ブラジルで売れ、米国で売れ、さらに米国で賞まで取れば、世界のマンガ界でのぼりつめたことになるのだろう。

筆者は日本のマンガはブラジルのサッカーに匹敵するくらいハイレベルだと思うのだが（リテラシーの違いだけであろうか？）、ブラジルでの認知度は上がってきているとは言え、まだまだ低いようである。ブラジルのサッカー選手のようにあぶれている日本のマンガ家が、ブラジルでマンガの手ほどきでもしてくれれば少しは変わるのではないだろうか（ブラジルのマンガ界にとって良いか悪いのかは別として）。

マンガ専門店 COMIX（正面から）

マンガ専門店 COMIX の店内

ダニロ・ベイルート作品「二人だけの盗賊団」

ガブリエル・バー作品「ふたり兄弟」

ブラジルにおける日本マンガ受容史
日系人がブラジルで読んだマンガ

佐藤フランシスコ紀行
（ブラジル漫画家協会会長）

私と日本マンガの出会い

私は南米で人口が一番多い都市、サンパウロで生まれた。小学校時代は町の中心部のビルに住んでいた。日系人家族は私達一家だけで、あとはアラブ系やポルトガル系の家族ばかりだった。彼らは皆カトリック信者だったが、わが家だけが仏教だった。小学三年生になると授業の中にカトリック教育が含まれていたため、カトリック教室の時間は、他の宗教の生徒は教室の外で待っていなければならなかった。40 人の男の子だけのクラスに日系人は 10 人いて、全員が私と同じくこのカトリック教室に参加していた。やはり、日系人の母親は自分の子がブラジル人に差別されないようにと、皆と同じカトリックの授業を受けさせたのだろう。

私が通っていたのはサンパウロの州立小学校だった。最初は日本語しか話せなかったのが三ヶ月ぐらいでポルトガル語が話せる様になり学校ではポルトガル語で話すのが当たり前となっていった。10 人いた日系人のうち日本語が分からない子が半分以上だった。これは第二次世界大戦中、日本の敵になったブラジルに住んでいた日本人一世が戦後、自分の子供には日本語より英語かフランス語を学ばせた方が良いと考えるようになったからだろう。

手塚治虫先生と（於：サンパウロ美術館、1984 年 9 月）

私たち日本語の読める子供には、ひとつ得をする物があった。それはマンガの雑誌だ。日本から輸入されたマンガは単行本ではなく重い雑誌で、しかも週刊誌であれば一ヵ月分の四冊を一緒に縛ってあった。それは日本からの船が月一回しか来ないからだ。好きなマンガの続きを読みたくても一ヶ月待たなくてはいけない。でも友達も別の雑誌を買っているから自分のを読んだらすぐ持って行って借りて帰る。それを何人かで読み回していたため何時でも読むマンガはあったし、青年マンガや少女マンガも読んでいた。

アメリカのコミックと東京オリンピック

日本のマンガは素晴らしいと思っていたため、ブラジルのマンガやアメリカのコミックはほとんど見なかった。これは日本人の顔をした私たちの特別の世界であった。その世界では日本人がヒーローであり、夢を持って将来に挑む素晴らしい内容であった。というのも、ブラジルの現実の世界では、日系人の子供は 1960 年代、町を歩いていると馬鹿にされる可能性があったからだ。テレビの番組やアメリカの映画では日本人がヒーローのものはなく、日本人が出てきても大半はつまらない役か馬鹿にされているような役回りだった。とはいえ、素晴らしかったのは、ブラジルでは学校においては差別が無く、逆に日系人は頭が良いし真面目だとほめられる事が多かったことだ。

1960 年から1970 年代のマンガと言えば熱血物語とか一生懸命努力を重ねる主人公の姿が思い浮かぶ。具体的にいうと、ちばてつや先生の「明日のジョー」だ。そのころ、サンパウロ市の日本語学校で神尾先生が映写機を持ってきて 8 ミリ映画を見せてくれたことがあったが、確かぼやけた陸上競技のシーンだった。それが間違いなく私の東京オリンピックの思い出となっている。当時ブラジルでは日本は全くの別世界だった。インターネットもビデオも無い時代で、日本の情報もごく限られていたため、子供だった私達はオリンピック自体の大きさと素晴らしさも全然知らず、サッカー以外のスポーツも見たことがなかったからだ。当時私は小学一年生だったが、日本のマンガを読むようになって、少しずつ日本の事が分かる様になり、大人になってから 1964 年の東京オリンピックはものすごいイベントであったと理解するようになった。第二次世界大戦で破壊された日本が復興したと世界に知らせることになる大イベントであった。あのころ新幹線も日本の絵本などで見たが、実際比較するものも無く、デザインがきれいだったという思い出しかない。ブラジルでの鉄道開業は 1867 年なので、1872 年 の日本よりも 5 年先行していたが、その後の鉄道開発は不完全で、技術的な進歩もなく、高速列車など企画すらなく、新幹線とは別世界だった。

ナショナル・キッド

東京オリンピックの 4 年前、1960 年にプロレスの力道山がブラジルへ来て地元のプロレスラーたちと戦って勝利したと、父から後で聞かせてもらったが、その時、ブラジルに住んでいた青年アントニオ猪木を日本へ連れて行ったとの事。私の父はサンパウロ市の中央市場でスイカの卸売りをしていたが、父によれば、猪木さんは同じ市場で荷物をトラックから降ろすバイトをしていた由だ。確かに、猪木さんみたいに身体の大きな青年がいたら、何所でも目立っていただろう。

南米最大の「MangaCon」
（ブラジル漫画協会主催）

でも、子供に一番大きなインパクトを与えたのは日本のスーパーヒーロー、ナショナル・キッドのテレビ放送だった。ブラジルの人気音楽番組の後で流された第 1 部「インカ族の来襲」は、今でも記憶が鮮明だ。宣伝も予告もなく突然現れたスーパーヒーロー。ブラジルとは関係ないと分かっていながら、なぜ面白かったのだろうか。1964 年のことだった。当時のブラジルのテレビには日本人は出てくることはなく、日本人のヒーローなど考えられなかったからだ。

そうした思い出が沢山あったので、2014 年の訪日時、滞在していた金沢から東京へ行って江戸東京博物館の展示会「東京オリンピックと新幹線」を見ることにした。オリンピック当時の写真や関連資料が沢山展示されていたが、自分が想像していた 1964 年の日本とは少し違う印象を抱くことになった。 50 年も経ってしまった今考えると、ブラジルでは日本は戦争に負けたのだと言い聞かされ、日系人は少し馬鹿にされていたからかもしれない。それが東京オリンピック、新幹線とナショナル・キッドが出たことにより、日系人として誇りを持てる物がそろって来た、と思い、それらの出来事が当時の日系人の子供や若者に勇気を与えてくれたのだ。遠いブラジルにいても日本の勝利を祝って応援していた日系人が自信を回復したのも、新幹線やオリンピックのおかげ、そんなつながりを感じたのだ。

ブラジルのマンガ雑誌

歳月がたち 1960 年代の末、私は中学卒業を迎えるころだったが、そのころ新聞スタンド（バンカ・デ・ジョルナル）で新しいブラジルの雑誌が多数販売されるようになった。当時はディズニーやバットマンとかスーパーマンなどアメリカ物が多く、ブラジルの主人公はマウリシオ・デ・ソウザの「モニカ」とかブラジルのホラーマンガが少しあっただけだった。新しい雑誌には日本のマンガに似た物も有り、良く見ると日系人の作者が書いていた。これは日系人の南ケイジが 1967 年に始めたエドレル（Edrel）出版社の雑誌で、この出版社が発行するタイトルも「サムライ」、「忍者」、「空手」といった日本のマンガからの影響を見て取れる物が多かった。南ケイジ自身も手塚治虫先生の絵を真似てマンガを描き始めたらしいが、こうしてマンガを見て育った若い日系作家によってブラジルのマンガが始まったのだ。

日本のマンガを見た事がないブラジル人読者には全く新しいマンガとして熱狂的に受け入れられることとなり、エドレルの雑誌の発行部数も急増し、その結果多くの読者がブラジル風日本マンガを読んで育っていった。現在、プロのマンガ家として活躍する作家の多くは、子供の頃エドレルのマンガを読んでおり、今でも当時のバックナンバーをコレクションとして持っている由だ。

ブラジルの不安定な経済を乗り越えながら生き残った出版社だったが、軍事政権による言論弾圧によって、大人用の雑誌も発行していたエドレル出版社は毎日の様に警察に呼び出され、1975 年には閉鎖となってしまった。

それから 3 年後、エドレル出版社でマンガ家として活躍していた瀬戸クラウジオがパラナ州の小さな出版社グラフィパルの編集長となってエロチックマンガ雑誌「エロス」を発刊した。ブラジルの軍事政権も言論統制を緩め始めており、ある程度エロチックな物も発行出来るようになっていたのだ。この雑誌のヒットのおかげで瀬戸編集長は色々と新しいタイトルを企画・発行するようになり、そのため沢山のマンガ原稿が必要となって、私も新米マンガ家として友達の楠本ロベルトと共にこの会社でデビューすることになったのだ。ブラジルでは他にマンガを出版している会社はなかったので、既にイラストレーターとして活躍していた画家たちもマンガを描くようになり、その結果グラフィパル社は様々な雑誌の発行元として成長していく。

1984 年 9 月「マンガの神様」手塚治虫先生が来伯されたが、この時手塚先生の展示会、講演会や特別授業にも参加させて頂いた。帰国する前、先生は子供のような私の手を握りながら「マンガのファンの集まりはどこにでもあるがこれをどの様に成長させるかは貴方の責任です」と言われたが、誠にありがたい言葉であった。ブラジル漫画家協会が今まで続いているのも手塚先生のおかげといってよいだろう。

ブラジルで一番人気のある子供向けマンガ「モニカ」の作者マウリシオ・デ・ソウザは今でも「モニカ」を書き続けているが、彼の奥様は「モニカ」のアートディレクターであり日系人だ。マウリシオのスタジオには日系人のマンガ家も多く、明らかに日本のマンガの影響が見られる。2008 年、日本ブラジル移住 100 周年記念の年に「モニカ・ジョーヴェン」（青年モニカ）と言う新しいタイトルを出版したが、これは本当に日本のマンガに近い作品だ。子供であったモニカやその友達が青年になったマンガだが、その発行部数はロングセラー「モニカ」を上回るほどの 50 万部に達したのだった。

ブラジルのアニメ映画界をリードする アリ・アブレウ監督インタビュー

文責：編集部

『父を探して』ブラジル版リーフレット

1971 年生まれ（サンパウロ出身）のアブレウ監督が世界のアニメ関係者の注目を集めるようになったのは、昨年日本でも公開された長編アニメ映画『父を探して (O MENINO E O MUNDO)』が 2013 年のオタワ国際アニメフェスティバルでグランプリを受賞してからだろう。全編色鉛筆やクレヨンによる手描きや切り絵の混成から構成され、セリフ音声なしの、アニメ技法的にはなんともシンプルなアニメーション作品だが、その内容は、少年が別れた父を探す旅の過程で出会うブラジルの様々な社会問題―大都市と農村の格差、スラムの膨張、大規模農業が抱える環境破壊・労働問題などなど――を静かに問うものだ。この“社会派アニメ”は世界各国で様々な賞を受賞したが、その受賞数は 40 以上となっており、2016 年オスカー（アカデミー賞長編アニメ部門）にもノミネートされている。今回（9 月中旬）、文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞の受賞イベントに参席するため訪日したが、この機会をとらえ、ブラジル大使館でのトークショーの直前、1 時間近くインタビューすることが出来た。強行スケジュールと時差ボケで疲れ気味の監督だったが、アニメ論や映画論から始まって話題は宮崎駿監督から彼の出自まで自在に広がった。そのエッセンスをお届けする。

――映画のなかの音楽はナナ・ヴァスコンセロス (1944-2016) が担当しているが、彼は昨年 3 月病没（肺ガン）してしまった。世界で最も優れたパーカッショニストと欧米で評価されたナナとのコラボについて、まずお聞きしたい。

アブレウ　ナナは偉大なミュージシャン、パーカッショニストだが、僕は昔から尊敬していて、自分のアニメ作品に是非参加してほしいと思ってコンタクトした。ナナは事前に脚本を読むことは一切なしで、いきなりアニメ映像をみてもらったのだが、彼は、その場（スタジオ）で即興で鍋やフライパンを使ったりして画像にフィットする効果音を生み出していくんだ。全く驚くべき才能で、スタッフ一同彼の“魔法”に魅了されてしまった。彼が元気だったら、次の作品もお願いしたかったのに、全く残念だ。

――少年が別れた父を探し求めて旅に出る、という古典的なテーマは、様々な映画で描かれている。私は、ヴァルテル・サーレス監督（1997 年公開）の『セントラル・ステーション』を想い出してしまった。また、旅する少年が遭遇する社会問題、大都市における格差などは、ブラジル映画革新運動シネマ・ノーヴォの作品群、特にネルソン・ペレイラ・ドス・サントスとかグラウベル・ローシャとかの映画を想起させる。この辺についてはどうか。

アブレウ　僕はシネマ・ノーヴォの映画はほぼ全てみて大きな影響を受けたことはご指摘の通りだが、海外の映画作家ではロシア（ソ連）のタルコフスキー（1932-1986）の映画作品や批評文に惹かれた。映画から様々なインスピレーションを受けたことは事実だ。

――日本人なら誰しも思う質問を。日本のアニメ界を代表する宮崎駿監督については？

アブレウ　もちろん、宮崎監督作品は全てみた。特に『となりのトトロ』と『千と千尋の神隠し』が好きだ。宮崎監督は僕にとっては心の師匠だったが、実は、昨日（9 月 19 日）、スタジオジブリを訪問し、宮崎監督と会って会話を交わしたんだ。今でもコーフンしているよ。

――監督にとって長編第三作となる次作『魔法の森の旅人』は、構想段階は過ぎ、具体化に向けて動き出していると聞いているが。

アブレウ　どんなストーリー展開になるかはまだマルヒ（と片目をつぶる！）だが、制作資金手当ての目途が付き、アニメ制作も自分のスタッフだけでなく欧州（ルクセンブルグ）の業者とのコラボでいくことが決まっている。大体のスケジュールは、来年 2018 年前半までに脚本を完成させ、並行して制作をスタートし、2019 年ないし 2020 年の公開を目指している。この作品はセリフも音声入りだし、サントラもありだから、面白くなるよ。

――たまたま、ブラジルでベストセラーになっているロック歌手ヒタ・リーの自伝を読み終え、監督と同じサンパウロ出身の彼女の出自（アメリカ移民 4 世にしてイタリア移民 3 世）を知ったところなので、監督のルーツをお聞きしたい。お名前からすると、ポルトガル系だと思うが。

アブレウ　確かに名前からいえばポルトガルだが、父方と母方を合わせてルーツをたどると、ポルトガル、イタリア、ドイツだけでなく、ブラジルの先住民インディオの血も入っているんだよ。まあ、その意味では典型的なブラジル人といえるかもね。

第20回 日本ブラジル経済合同委員会が開催

大前孝雄（当協会会長）

押しなべて景気が緩やかな回復基調に転じ、本年の GDP 成長率が 3 年振りにプラス（+0.5% 程度）に転じるとの見方が拡がる中、去る 8 月 28 ～ 29 日、パラナ州クリチバ市で第 20 回日本ブラジル経済合同委員会が開催され、日本側約 130 名、ブラジル側はブラジル全国工業連盟（CNI）アンドラージ会長以下約 250 名、計 400 名近い政財界代表の参加を得て近年では最大規模の開催となり、第 20 回の節目にふさわしい会合となった。

日本ブラジル経済合同委員会は、経済界に大きな影響力を持つ日伯双方の財界人による政策対話の枠組みとしての日伯賢人会議と緊密な連携を保ち、本年 4 月に開催された第 7 回日伯賢人会議での討議内容を踏まえ設定された経済連携、ブラジルでのビジネス環境整備、ブラジル側で国家的課題となっているロジ・インフラ整備という 3 つの優先テーマを中心に、夫々の分野における今後の協力強化の可能性を巡り分科会方式で延べ 1 日半に亘り活発な議論が交わされた。

私は経団連日本ブラジル経済委員会企画部会長としてこれに参加したので、以下その結果概要を報告する。

1）日伯経済の現状と展望

❶伯国側からは、同国経済が 2 年間続いたマイナス成長を脱し、今年はプラス成長（+0.5%）に転じる見込みであること、また、テメル大統領の下で大胆な制度改革（労働・年金・税制・政治制度）を進めるとともに、先進国入りを目指し OECD への加盟申請を行う等、先行きの展望の明るさが説明された。

❷日本側からは、アベノミクス 3 本の矢の成果と今後の課題を説明。また、日本企業による伯国インフラ分野への投資拡大に向けた金融支援における官民の役割分担、両国間の人的交流の現状や観光立国に向けたインバウンド誘致政策等を紹介した。

2）貿易および投資

日伯双方は、自由で開かれた国際経済秩序の維持、強化の重要性を共有した上で、両国間の更なる貿易・投資の拡大に向けて、日本とメルコスールという新たな枠組みでの経済連携協定（EPA）の早期交渉開始を両国政府に働きかけるべく、経団連と CNI が 2015 年 9 月に取り纏めた「日伯 EPA 関する共同研究報告書」を次回合同会議までにアップデートしていくことで合意した。今回合同委員会での注目すべき成果の一つと評価される。

3）ブラジルのビジネス環境整備

❶伯側から、各種投資インセンティブや投資誘致を目指す産業分野の紹介に加え、税関手続きの簡素化等、グローバル・バリューチェーンにおける伯国の産業競争力強化に向けた投資環境整備に尽力中との説明がなされた。

❷日本側より、自動車産業を例に挙げ、近年発展目覚ましいメキシコとのコスト比較を示した上で、更なる競争力強化のため物流の効率化、複雑な内国税の簡素化等、いわゆる「ブラジル・コスト」の改善に繋がる抜本的な取り組みが不可欠との提言がなされた。

また、ブラジル日本商工会議所からは、投資拡大のための環境整備を目指し、この 4 年間に亘り推進している AGIR 活動（Action plan for Greater Investment Realization ：ブラジル産業の国際競争力強化やブラジル・コストの改善を目的としたブラジル政府への政策提言活動）の最近の状況（最優先注力分野として「労働法」「税制」）ならびに今後の活動計画についての報告がなされた。

4）産業戦略

日本側より AI や IoT、ビックデータを活用した超スマート社会の構築を目指す「Society 5.0」への取組み、ブラジル側からは製造業の生産性向上に向けた「Industry 4.0」等の活動が夫々紹介され、今後も双方の産業戦略や政策を共有しつつ新たな分野での協力拡大に努めることで合意。

5）農業およびインフラ整備（筆者がモデレーター）

❶伯国側は、国内のインフラ整備のため推進中の「投資パートナーシップ・プログラム（PPI ）」の進捗状況を説明し、日本企業の積極的参加を求めた。

日本側からは、穀物輸送インフラに関し、多くの日本企業が穀物生産・販売事業を展開する北部 4 州マトピバ地域およびマトグロッソ州東部地域の穀物輸送インフラの開発への高い関心を表明。ブラジル側もその重要性は認めたが、これを PPI 対象プロジェクトとして追加承認するまでには至らず。

一方、都市交通インフラ事業に関しては、サンパウロ地下鉄 6 号線事業案件はじめ具体的事例を示して、同分野への日本企業の投資拡大に不可欠な投資環境の整備に関わる具体的提言、要望を行った。

❷総じてブラジル側からは日本側提言、要望に対する具体的提案、施策の提示が得られず、今後、それを引き出すべく継続的フォローアップが必要と判断される。

6）天然資源およびエネルギー（環境関連）

日伯双方は、ブラジルの豊富な農産物を活用したバイオ・エネルギー分野の展望をはじめ、高効率石炭火力発電や海流発電、JBIC のグリーン・ファイナンス等、環境に配慮した資源・エネルギー分野での取り組み事例を相互に紹介し、今後の協力の可能性を議論した。

次回会合は、来年 7 月下旬に東京で開催すべく今後日程調整を進める。

ボベスパ指数から見えるもの

永田 翼（たすく）
（「とれたてサンパウロ！」主幹）

せっかく住んでいるのだから、できるだけホットで確かなブラジル情報を発信したい。注目したのがボベスパだ。ブラジルの政治、経済そして社会の動きを、数字で見られるからだ。しかし、経済の専門家ではないし、株屋さんでもない。言うなら野次馬だ。それでも見えてくることもあろうと、2012年からブログ「とれたてサンパウロ！」を始めた。見当違い、間違いはあるだろうが、それなりの根拠は提示する。まあ無料なんだから独断、偏見、悪乗りは許してもらおうという魂胆だ。

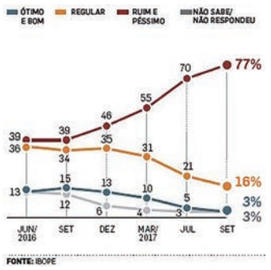
さて、企業の決算は通知表だ。いくら努力しても結果が出なければ、会社はつぶれる。学校なら落第する。政権も崩壊する。汚職のあげく、財政赤字の粉飾をしたPT政権は、ジルマの弾劾で交代を余儀なくされた。発表される数字を、額面どおり信じてはいけないという教訓となった。

指数の図表の右側の「K」は1000（指数ですから単位はありません）

もちろんボベスパ指数も、経済の実態、企業の業績を反映するとは限らない。勝手に期待し思惑で動く投資家によって、上がりもすれば下がりもする。ボベスパの数字をにらみながらその動きの裏を読むと、意外な発見がある。日本との違い、ブラジルらしさが随所に見られて面白い。あきれつつ、感心する。ブログの種に困ることはない。

経済は回復、政権も継続。でも株式投資は？

ジルマ政権による失政で落ち込み、約3年間続いたブラジル経済も、やっと回復し始めた。9月末現在の数字を見ておこう。今年の第1、第2四半期GDPは連続でプラスとなり、年末予想では+0.68%が予想されている。2015年に10.67%に達したインフレは12ヶ月累積で2.46%に沈静化し、基本金利もジルマ政権末期の14.25%から8.25%まで下がった。失業率もピークとなった今年3月の13.7%から12.6%まで下げた。そして年初来国内自動車新車販売も年初来累積で前年比+7.8%となった。2016年1月の3万7177ポイントを底に、ボベスパ指数も上昇している。9月20日には、一時7万6419.58ポイントの史上最高値を記録した。それでも、このまま一本調子で上げ続けるわけはない。



グラフの下から2番目の濃いブルーの線が「支持率」

市場は「汚職の追及で揺さぶられることはあっても、テメル政権の交代はない。そしてメイレーレス財相の緊縮策の方向性は妥当」と先行きを楽観的に見ている。

しかし、政治的な爆弾がいつどこで爆発するかわからない。突発事件はありうる。あまり安心しないほうがよい。外国人投資家がリスクをとってボベスパでの株式投資を行うのは、最長3ヶ月、つまり年末までとしたほうがよさそうだ。

企業の業績でみれば、合理化、人員削減などを経て売上げ減にもかかわらず増益に転じるところも増え始めた。しかし政府の歳出削減は実現できていない。2013年末にGDPの51.5%だった国の債務比率は、8月末時点で73.7%にまで増加している。投資のための財政出動などできるわけでもない。そこで8月末に政府は、これまでタブー視されてきた民営化に踏み切った。

民営化の対象は中途半端

インフラが中心であっても、投資は歓迎できる。本来なら、ペトロブラス、ブラジル銀行、連邦貯蓄金庫、郵便公社なども民営化の対象にすべきだろう。政府、民間とも投資能力がないので、民営化は即外資導入を意味する。中国からの投資が目立つが、投資してくれるなら、どこでもいい。民営化の発表は、投資家たちの期待を後押しして、ボベスパの9月相場を演出した。ところが市場がいくらテメル政権を支持しても、国民は全くそっぽを向いている。

9月15-20日に行われたIBOPEの世論調査によれば、テメル政権への支持率は3%、不支持率は77%になった。史上最低といわれたサルネイ政権でも支持率は8%あった。ちなみに2015年のジルマ政権は9%だった。政治の常識では、支持率が10%を切った政権は崩壊する。テメル個人の不支持率は実に89%、信頼せずは92%。明らかに死に態だ。しかし、ブラジルには解散がなく、国会での安定的多数を確保していることから、弾劾の可能性もない。テメルは任期を全うできる。それでも再選など、ありえない。

18年大統領選は予測不能

2018年10月の選挙規則は、まだ決まっていない。そして、大統領になりたい政治家は多くとも、候補者すら固まっていない。ルーラも、汚職での有罪判決を受けており、再出馬はできそうにない。2014年選挙を接戦で落としたアエシオも汚職で脱落した。メイレーレス財相を推すのは市場だけだ。極右で軍事政権擁護派のボウソナロやサンパウロ市長のドリアが新顔として取りざたされているが、全国的に支持が広まるとも思えない。環境主義者のマリーナも霞み始めている。本来なら有力視されて不思議のないサンパウロ州知事アウキミンも、党内の足の引っ張り合いで浮上してこない。つまり、国民のほとんどが、既存政治家に愛想を尽かしているのだ。大統領になって欲しい一番手に上がるのは、PT政権のメンサロン汚職を断罪したバルボーザ元最高裁長官だ。しかし、出馬はまずないだろう。1年後の大統領選挙は、いまだ全く予想困難だ。

ブラジル三井物産 在伯グループ会社は28社
資源からインフラサービスへ

土屋信司
（ブラジル三井物産㈱社長）

ブラジルでの事業展開について

ブラジルにおける旧三井物産と現在の三井物産の歴史は、旧三井物産がリオデジャネイロ市に現地法人ニッポ・ブラジレイロ有限会社(Nipo Brasileiro Ltda.)を開設した1938年まで遡る。第二次世界大戦勃発により同社は解散してしまうが、1960年に現在の三井物産ブラジル法人の母体となるブラジル物産有限会社(Bussan Brasileira Ltda.)が設立された。それから約60年を経た現在では約8,800億円の投資残高と、古い読者には三井の名前を1966年設立の三井肥料(Fertilizantes Mitsui Indústrial e Comércio Ltda.)を通じて知っている者も少なくないと思うが、多岐のセクターにまたがる28の在伯グループ会社を保有するに至っており、特に大きな事業資産があるため三井物産本社から毎年最も多くの語学修業生が送られてくるのがブラジルである。

ブラジル事業展開の礎となったのは資源関連

1960年から70年代にかけて拡大した日本の鉄鋼産業向けに、ブラジルから鉄鉱石の輸出を開始したが、1971年には鉱山会社MBR(Mineracoes Brasileiras Reunidas)に出資、さらに1997年にはその親会社であったCAEMIの一部持ち分を取得し鉱山事業にも参入した。後に全株式を取得したCAEMIの50%を、当時はMBRの競争相手であったヴァーレ(当時はCVRD)に売却したことで、現在まで続くヴァーレとのパートナーシップが始まった。その後は、ヴァーレが開発しているモザンビークの石炭事業への参画や、ヴァーレの100%子会社だった貨物輸送事業のVLIの一部株式取得等を通じて同社との事業を多様化・拡張してきた一方、ブリヂストン製オフロードタイヤや新日鐵製鉄道レールの供給等を通じても、ヴァーレの企業価値の向上に貢献してきている。

マウア広場前を移動中の新路面電車とリオの新名所「明日の博物館」

ブラジルの強みである鉄鉱石を代表とする資源ビジネスにおいてヴァーレと並び重要なペトロブラスとも関係は長く、三井物産はパートナーと共同で、プレソルト含む有望な深海鉱区での石油採掘に不可欠な浮体式石油ガス生産設備であるFPSOやFSOをこれまでに10船提供しており、これらの設備は伯国内石油生産の約20%を担っている。同社とは伯国内の天然ガス配給事業も共同で運営しているが、これは2006年に旧エンロンから資産を買収し誕生した三井物産子会社の三井ガスを通じた事業である。2014年からペトロブラスは大規模な資産売却計画を推進中だが、この計画の中で2015年に、同社のガス配給事業子会社で三井ガスのパートナーでもあったガスペトロの49%を取得したことで、三井ガスの事業は19の州へ、量にすると国内ガス配給の約半分を担うまでに拡大した。このように、ヴァーレとペトロブラスは三井物産にとって全世界的に重要なビジネスパートナーとなっている。

インフラサービス事業での挑戦

ブラジルでは上記のように資源関連が最も歴史の長い事業だが、2000年代から注力しているのは国内需要型のインフラサービス関連事業である。世界5位の人口と国土を保有しインフラニーズは著しく大きいものの、環境上・経済上の政府規制が厳しく巨額のファイナンスが必要となるため開発が遅れており、民間の参入余地は大きい。例えば、電車含む鉄道システム供給で昔から関与のあった都市交通分野では、2006年にブラジルで初のPPP案件であるサンパウロの地下鉄4号線を運行する事業会社に少数株主として参画したのが最初の投資案件となった。この案件を通じて知見を積み、リオの近郊鉄道や路面電車、ゴイアニアの路面電車及びサンパウロの地下鉄6号線といった事業にも参画し、取組規模を拡大している。都市交通は日本の技術や知識が大きく貢献できる分野でもあり、JR西日本や政府系ファンドのJOIN参加を得て、事業の良質化と拡大に取り組んでいる。財政再建中の連邦政府や多くの州政府は、民営化やPPP案件を通じて民間投資をインフラ事業に呼び込むためのプログラムを推進しており、三井物産は今後もブラジル国民に良質のインフラサービスを提供する機会を積極的に追求していく。

連載 ビジネス法務の肝

知的財産権と職務発明制度

ホベルト・カラペト
(Licks Attorneys.
ブラジル弁護士)

企業の研究開発の活動はますます国際化されている。多くの日本企業が海外において研究所を設立することに伴って、外国人による研究開発や日本人出向者が海外で研究開発する活動から発明が出てくることがある。その場合、発明の帰属や発明に対する対価が問題になる。

ブラジルにおいて、研究所を設立することによっていくつかのメリットがある。税金の優遇制度を利用することもあり、複雑なブラジル税制では大きいポイントとなる。そして、ブラジルおよび南米の研究者を雇うことによって、ブラジルを含めて南米に適合する商品を開発することが可能となる。しかし、ブラジルではブラジル労働法典（CLT）により、労働者を手厚く保護する文化がある。それが日本の労働環境との一番の違いであり、日系企業が苦しむ要因となっている。そこで、ブラジルに関する「職務発明制度」を紹介する意味が出てくる。

特許、実用新案、意匠について、被雇用者（インターン含む）が創作した発明は、ブラジル産業財産権法により規律されるものの、雇用に関わる契約上の義務と権利は CLT で規律される。これらの法律規定は互いに補い合うように適用されている。ブラジル産業財産権法は、民間及び公的セクターにおける雇用者と被雇用者との間の発明、実用新案の取扱いについて、第 88 条から 93 条において規定しており、これらは 121 条に基づき、工業意匠にも適用されている。

職務発明の帰属および譲渡

ブラジルにおいて、職務発明制度を理解するには、社内で創出された発明は 3 つの種類に分けられていることを知る必要がある。それは「職務発明」、「自由発明」および「業務発明」である。

職務発明はブラジル工業財産法第 88 条（及び同法 121 条）で規定されている。発明、意匠、実案がブラジル内で創出され、雇用契約（work contract）の目的は研究・発明活動業務の場合、または被雇用者が契約した業務の性質上生じるものである場合、発明に関する権利は自動的に雇用者に帰属すると規定している。

ブラジル産業財産権法第 88 条で定義された被雇用者発明に関する規定の他、以下の規定が存在する。ブラジル産業財産権法第 90 条（及び同法 121 条）は「自由発明」を規定しており、内容としては、被雇用者が創出した発明、工業意匠、実用新案は、それらが自己の雇用契約に関連なく、かつ雇用者の資源、手段、情報、原料、施設又は設備の利用から生じていないことを条件として、被雇用者に帰属すると規定している。

また、ブラジル工業財産権法第 91 条は「業務発明」について規定しており、内容としては、発明活動を実施する目的で契約してはいないが、雇用者の資源、手段、情報、素材、施設又は装置を使用した被雇用者が発明をした場合、契約で別段の取り決めをしていなければ、発明は被雇用者と雇用者は持ち分 50%ずつ帰属すると規定されている。

職務発明に係る対価の規定および実務

ブラジル産業財産権法第 88 条第 1 項は、被雇用者の職務発明に対する報酬について、対価を支払う必要はないとしている。つまり、被雇用者は研究開発のために雇われた場合、発明を創出したとしても、日本のように相当の対価を支払うことがなく、給料だけで十分である。

自由発明については、被雇用者が発明の権利者であるため、対価を支払う必要がない。しかし、雇用者が発明を利用したい場合にライセンスをとることになり、ローヤルティを支払うことがある。

雇用者と被雇用者が発明、工業意匠、実用新案の共有権者となった状況（つまり、業務発明の場合）では、異なる取扱を規定した契約がない限り、共有権者間で報酬条件を交渉する必要がある。雇用契約に、所有権を雇用者に譲渡する条項が含まれていても、一括支払い、実施料または定期的な報酬の支払いは保証される。法律上、報酬として実際に支払う金額や計算方法、変数などを規定していないが、91 条第 2 節では報酬は「公平」でなければならないと述べている。契約で異なる定めがない限り、業務発明の場合、被雇用者はその特許の活用で得た利益の 50%を得る権利を有する。被雇用者が複数名いる場合、それぞれに支払われるべき部分は被雇用者間で均等に分けられる。

職務発明に関連する訴訟

ブラジルの労働制度の関係で、契約関係がブラジル法に基づくものとすれば、外国人と内国人に同じルールが適用される。一方、ブラジル法において就業規則に関して直接規定した条文はない。しかしながら、知的財産及び被雇用者の競業禁止義務について取り決めた就業規則を有する場合、裁判所は雇用契約と併せて分析する傾向になりつつある。

ブラジルでは、この問題に関する判例は比較的少ない。傾向としては、被雇用者と雇用者間で知的財産権に関する所有権と報酬を議論する紛争は労働裁判所で審理されて判決が下される傾向にある。

労働裁判所は、産業財産権が雇用関係から生じたか、または雇用契約に関連して生じた場合には知的財産権に関連した紛争を解決する権能を有すると考えている。労働裁判所は被雇用者に対して保護的なアプローチをするトレンドがあるため、労働裁判所で管理する事件について注意を払う必要がある。

高税率で複雑なブラジルの消費課税（その１）

都築慎一
（ブラジル公認会計士、
トーマツアドバイザー）

ブラジルに進出している日系企業に、アンケートなど「ブラジルでの事業活動で何が問題となることが多いか？」と尋ねると、大体トップスリーには、複雑な税制や労働法が入ることが多い。本稿では、ブラジルの税金の仕組みの全体像、複雑と言われる理由や、なぜ複雑になってしまったのかとなどの問題点を、２回に分けて説明することとする。

消費に対する課税を軸にした税体系

国の税体系を考える場合、何に対して課税しているのかという観点から見ることがよく行われる。換言すれば、公共サービスや社会保障の財源を受益者である国民に負担してもらうために、負担先をどこに求めるかと言うことである。一般的には、負担力は所得、消費、資産の大きさにより、計測が可能と考えられるため、課税ベースをこれら３つの対象に対し求めることで国の税体系が構成されている。

下記の表を見るとわかるように、ブラジルは消費に対する課税の割合が約 55%と突出していることがわかる。ちなみに日本では、経済協力開発機構（OECD）の 2013 年ベース統計によれば , 税収に占める割合は、おおよそ 33%である。イギリスやドイツも 40%を超える高い比率ではあるが、ブラジルはそれより多い。世界でも、消費に課税の重きを置く国として知られている所以だ。税率も高額となっている。実は、ブラジルの税が複雑と言われるのは、この消費税の仕組みが複雑なことによるからであるといっても過言ではない。とりわけ、消費に対する間接税の制度が複雑とされる。

消費課税の仕組み

日本企業が、ブラジル進出のための事前調査をしようとして、製品コストがどのくらいになるのか、商品の流通過程で消費者販売価格がいくらになるのかを計算しようとすると、その複雑さを身を持って知ることになる。消費課税では、商品の流通段階での支払義務者と、最終的な実質負担者（消費者）が異なる付加価値税と呼ばれる制度が採用されており、税金は一般的には商品の価格にオンされている。ここまではブラジルも日本も同じだ。

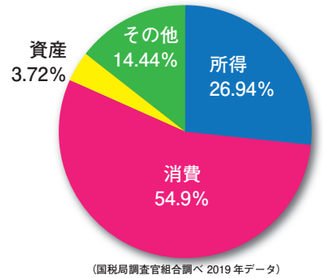
しかし、ブラジルでは一つの製品価格にいくつもの間接税が課せられる。複数の間接税のうち、最終的に消費者に転嫁される付加価値税もあれば、そうでないものもある。また、税率は、一般税率は決まっているものの、例外的な税率が多数あり、製品の種類ごとに異なっている。ブラジルの製品価格に含まれる税金は、①連邦税の社会負担金 (PIS/COFINS)　②同じく連邦税の工業製品税（IPI）　③州税の商品流通税 (ICMS) 、サービス提供に課税される④市税のサービス税 (ISS) がある。

①の社会負担金は、製品の価格だけでなく、サービス価格にも課税されている。多少専門的になるが、工業製品税は、製品ごとに税率が異なり、製造段階で課税する単段階課税となっている。一方、商品流通税は、複数税率の付加価値税で、製品により、単段階課税または多段階課税と２本立ての課税方法になっている。また①から③の税金は付加価値税だが、④のサービス税は、付加価値税ではなく、たとえば工事を請け負った業者が、下請け業者などに一部または全部を発注すると税金は累積されることになる。

工業製品税とサービス税を除くと税率は高い。社会負担金と商品流通サービス税を合わせると表面税率で 27.25%にのぼる。税金を含んだ金額に課税されるため、実効税率は更に高くなる。このように消費間接税制度は極めて複雑だ。

次回は、課税計算の数値例、高額な消費課税と社会の対応、制度が複雑となった理由などを考えてみたい。

税収構成比



（国税局調査官組合調べ 2019 年データ）

ブラジルにバイオリンの弓工場
夢ふくらむ

岩尾 陽（当協会理事）

ブラジル・ペルナンブコ州の州都であるレシーフェ市は14年のサッカー・ワールドカップで、日本代表の初戦が開催され、その名は少し知られるところとなった。しかし、レシーフェと日本は、スポーツ以外にも深い繋がりがある。それは意外なことに、クラシック音楽である。

インターネットでペルナンブコあるいはフェルナンブコ（クラシック音楽界、バイオリン製作の世界ではむしろ、こちらの方が有名）と検索すると、「バイオリン弓の材料として世界一」であるという事がわかる。ブラジルの国名の由来でもあるパウブラジル（Pau Brasil）の木は、16世紀初頭から、赤色染料として大量に伐採されヨーロッパに渡った。18世紀になると、強くて弾力があり音響の良いバイオリンの弓材としてフランスなどの有名な弓職人たちが特にペルナンブコ産を使うようになったという。

私の親友で、ペルナンブコ州の判事をしているジョアン・タルジーノという人がいる。彼は11年前からレシーフェでも最悪の貧民街（ファベーラ）の子供たちに、クラシック音楽を通した教育、具体的には子供達にバイオリンなどの弦楽器を与え、弦楽オーケストラ Orquestra Criança Cidada（以下、オルケストラ）を組織する活動を始めた。

ある時日本に居た私のもとにジョアンから連絡があった。オルケストラの楽器のメインテナンスなどに関わっていたジョン・バチスタさんの話だった。若い頃からバイオリンと弓の製作者をしてきた職人だ。

「バチスタさんが50年以上もコツコツと蓄えてきたバイオリンの弓材、ペルナンブコ材が26000本ある。この貴重なペルナンブコ材が価値の判らない人びとによってそのうち燃やされてしまうかもしれない。何とか日本で購入者を捜してもらえないだろうか？」という。私は実際、ペルナンブコ弓材の写真を見て、これは世界遺産に匹敵するほどの価値があると直感した。

早速、日本でバイオリンや弓を制作している会社に連絡を取ったところ、東京にある文京楽器が興味を示してくれた。あとで考えると、文京楽器なしには、この壮大なプロジェクトは完成しなかったと思う。

私と文京楽器の堀酉基社長（当時は取締役）そして友人ジョアンの3人でバチスタさんを訪ねた。26000本の弓用の木を見て堀さんもその材質の素晴らしさに大喜びだった。私も素人ながら、弓材の断面の、虎目のように光る縞模様の美しさに感動した。バチスタさんは一昨年、83歳で他界したが、ブラジルの木を守ることができて満足してくれたと思う。

さて、ジョアンがオルケストラの練習場を案内してくれた時のこと。将来はそこにバイオリン製作のアトリエを作り、子供たちの手に技術を付けてやりたいという彼らの望みがわかった。そのためのスペース、機械設置などが少しずつ出来上がっているようだ。　しかし、私たちが一番驚いたのは練習場の外の壁面に大きく掲げられた、バイオリンの才能教育法では世界中で高名な鈴木鎮一先生のお言葉だった。「鈴木メソッド」の神髄がポルトガル語で書かれている（写真左が岩尾氏、右は堀社長）。

“私の最大の望みは、世界の総ての子供たちが素晴らしい才能に恵まれ、人間的に素晴らしい創造物であり、幸せな人になる事です”

“私は自分の総てのエネルギーをその実現の為に捧げます。何故なら、総ての子供たちはその資質を持って生まれてくるのだと言うことを私は確信しているからです”

このファベーラ・オルケストラの活動がローマ法王庁に届いたのだろう。ローマ教皇フランシスコからの招待が舞い込み、2014年10月31日、バチカンで献奏する栄誉に浴すことができた。カトリック信者の多いブラジルで、ローマ教皇に招かれたオルケストラの少年達や関係者の喜びは如何ばかりだったか。

バチカンの演奏会では日本人バイオリニストが協力してくれた。数々の賞を取った久保陽子さんで、教皇フランシスコの前で、40分程子供たちのオルケストラと共演した。

私たちの仕事はまだ終わらない。バチカンでのコンサートの翌年、再びローマに戻った。目的はオルケストラと久保陽子さんの共演するコンサートを記録に残す事。市内の古い教会を借りて DVD と CD のキットを一万セット製作した。5000セットをローマ教皇に献上し、2500キットをオルケストラに、そして残りの2500キットを日本に持って帰った。

私たちのオルケストラ支援の主な目的は、プロの音楽家を要請することではなく、オルケストラ活動を通して「良き市民」を社会に送り出す事である。その為には音楽教育の他にも、少年達に将来の生活を支える何かの技術を身に着けさせる事が不可欠と考えている。バイオリン弓とバイオリン本体の製作学校をレシーフェに創り、専門の製作者を養成する計画だ。将来的にはレシーフェで「世界バイオリン弓製作コンペティション」のようなものができればこの上なくうれしい。

ブラジル日系社会を支え続ける女性たち

中平マリコ
（歌手）

「ブラジルには日本に帰りたくても帰る事の出来ないお年寄りが沢山居るのよ。そんな人達にぜひ日本の歌を届けてあげて」とブラジル移住経験のある女性に声をかけられ始まった私のボランティア活動も今年で 14 年目を迎えた。日本の23倍の大地に語り尽くせぬ苦労を重ねながらも老若男女が手に手を取り合い頑張って築いた日系社会には日本の心が沢山残っている。この歴史ある日系社会も来年は「移民110周年」。男性の活躍 無くしては語れないと思うが、半面「女性の支えなくして日系社会なし」と言っても過言でない。私が訪れたブラジルの場所は80カ所にのぼるが、どこの町に行っても、どこのイベントに参加しても女性パワーの素晴らしさを目の当たりにする。

古き時代の日本がそうであった様に、女性が家庭を守るのは当たり前という考えが長きに渡り継承されている。モノが何もなかった時代から今に至るまで、何をどう使ったらどうなるかをいつも考え、準備し、物事をスムーズに進めてゆく。その様は見事としか言いようがない。あらゆる日本文化を大切に守り受け継ぐ県人会のイベント「日本祭り」の中の食文化にスポットライトを当ててみよう。47都道府県、全てのブースの中で準備する大半は女性である。中には90歳台の女性もおり「学べることが多いのよ」と動き、働ける人は年老いていても手伝いをするのが当たり前の様だ。

いつも親しくして貰っている和歌山県人会婦人部の宮下会長にお話を伺ってみた。7月7日から三日間開催された日本祭りで販売する予定のお好み焼き4700食分の準備は年初から始まり、中に入れるキャベツの刻みは一週間前から始まるとのこと。また、使用する全ての材料の量、集める方法を聞くだけでも気が遠くなる。「大変なのよ」と言われる笑顔が眩しく素敵だ。これは地方都市の女性も同じで「これをこうして、あれをこうして」と何でも何人分でもいとも簡単にやってのける。

現在のブラジル日本文化福祉協会の会長は初の女性。呉屋春美会長は女性本来の細やかな気遣いを生かしながらも、肝心要では鋭い英断を下しグイグイ皆を引っ張ってゆく「肝っ玉会長」だ。女性本来が持つ「母性＝守る」がなし得る技であり、だからこそ凛とした姿が美しい。出会った全ての日系女性が私の目標である。

ジャーナリストの旅路

サンパウロ再び

市川亮太
（時事通信社　サンパウロ支局長）

９年ぶりにサンパウロに戻ってきた。５年と数カ月、運動担当として飛び回った米国からの横滑り。弊社では、サンパウロ支局は若手の修行の場と位置付けられており、２度目の赴任は小生が初めての上、海外から海外への転勤自体あまり例がない。同業者からはうらやましがられるが、同期がデスクに上がって拙稿に筆を入れている現状に、心境は複雑だ。はて、社上層部でどんな力学が働いたのやら。

こちらで初対面の人に２度目の赴任だと言うと、よく「ブラジルは変わりましたか」と聞かれる。実に難しい質問だ。

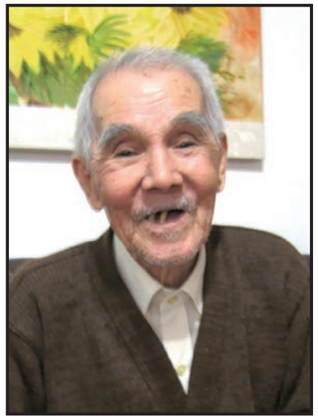
チエテ川の目に染みるようなかぐわしき香りは10年前と同じだ。テレビが映し出すのは強盗殺人や麻薬絡みの殺人、高速道路で横転したトラックに群がって積み荷を盗む住民、政治家汚職のニュースばかりというのも一緒。デコボコの歩道、浮浪者がたたずむ光景は何世紀たっても変わらないに違いない。残念ながら殺人、強盗事件の件数は高止まりしている。ファベーラはしばらく前の好景気の恩恵を何ら受けていないように見える。支局も助手の顔ぶれも（自分も含めて少し老けたが）一緒。

一方、通りを行き交う車は大型・高級化した。数十年落ちのフスカはほとんど見かけないし、路肩の故障車も明らかに減った。スマートフォンを筆頭に、高価な製品が貧困層にまで行き渡っている。残念なことにインフレが進み、飲食費は1.5倍から２倍になってしまった。

でも、何より変わったのは自分に見える「景色」だ。最初の赴任は31歳の時だった。ポルトガル語も全く分からない状態で、何もかもが新鮮だったが、戸惑うことばかり。でも今は言葉にはあまり不自由しない。新聞も何とか読めるし、地下鉄も乗りこなせる。日常不便を感じることはほとんどない。かつてはオジさんばかりで近づき難かった日系企業の社長、重役クラスとも、さほど気後れなく話せるようになった。

偉い方々と年齢が近づいたこともあるが、東京の政治部でセンセイ方や官僚を取材した経験、米国で異様なまでに尊大な日本人大リーガーを追った経験が、眠っていた図々しさを引き出してくれたに違いない。ブラジルを離れてから約10年。この間得た貴重な経験を武器に、30代とは全く違った視点で、ブラジルと中南米の面白いストーリーを発掘し、他の中南米特派員に一泡吹かせたいとひそかに出稿計画を練っている。

作家松井太郎：ニッケイ新聞提供



追悼：松井太郎さん
ブラジル日系文学界屈指のストーリーテラー作家の死

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

在ブラジル日本語文学界のなかでも特異にして多面的な作品をいくつも発表してきた孤高の作家・松井太郎さん(1917～2017)が､9月1日永眠された。享年99歳。この遅咲き作家については、西成彦（立命館大学教授）と細川周平（国際日本文化研究センター教授）という博覧強記の研究者二名によって再発見・評価されたおかげで、お二人の編集による二巻本（『ブラジル日本人作家松井太郎小説選　うつろ舟』2010年、『ブラジル日本人作家松井太郎小説選･続　遠い声』2012年､いずれも松籟社）が刊行されており、主要作品は幸いにして日本で読むことができる。

この二巻本が刊行された時、筆者も購入して通読したのだが、扱っているテーマも、描写される場所も、ストーリーテリングの巧みさも、いわゆるコロニア文学の枠を凌駕しているので、「すげーなあ」とつぶやきつつ読み進んだ記憶がいまだに鮮明である。訃報を受けてから、あわてて本棚からこの二巻本を引っ張り出したので、この機会に改めて松井太郎文学について、私的メモを重ねてみたい。

2010年9月、サンパウロとマナウスを訪問した文芸評論家川村湊（法政大学教授）は､日本経済新聞文化面（10月17日付）に「リベルダージーブラジル小紀行」というエッセイを寄稿しているが、その結論部分で、「もっとも狭く､もっとも特殊なブラジル日系人文学（コロニア文学）が、ポストコロニアル（脱植民地）な時代と世界の、もっとも先鋭的なディアスポラ（離散民）の文学として読み直されるべきものではないか。」と、いかにも文学研究者らしい文章を記している。

筆者はこの見方（コロニア文学＝ディアスポラ文学）にさほど抵抗はないものの、コロニア文学が生み出した作家のなかでは特異な位置を占める松井太郎の文学作品は、「日本語表記のブラジル文学」と理解すべきではないか、と考えている。

例えば、長編小説「うつろ舟」の主人公は内陸の僻地で暮らす日系二世で、現地人化した彼に対して、英語の通訳をガイド役で雇って奥地のドキュメンタリー撮影（といっても大型ナマズを写真にとりたいだけ）にやってきた日本人クルーが、どうせドジンは日本語なぞわかるまいと決めつけて、彼を猿扱いする。これに対し、主人公はポルトガル語で「帰ってくれ」と話し、これが英語で日本人たちに伝わる、といっても本人は日本語もわかっているのに、こうしたブラジル的シーンを描写する。移民一世による日本語文学では、こうした現地化ないし土俗化した現地人の視点から文学を叙述することはないので、この点でも突破者文学といえる。

あるいは、「堂守ひとり語り」の主人公は、カヌードス戦争（19世紀末、バイーア州内陸部で展開された宗教的千年王国運動）の残党の孫であり、「野盗一代」ではカンガセイロ（義賊的野盗）の親分ランピアゥンを語り、そのランピアゥンに先行して主としてパライーバ州内陸部を荒らし回ったアントニオ・シルヴィーノの独白を模した「野盗懺悔」では、老いたシルヴィーノが自らの半生を語るスタイルだが、翻案というよりも創作といってよい。また「ジュアゼイロの聖者」は、マノエル･デ･アルメイダ･フィリョの原作コルデル冊子本の翻訳であるが、口承韻文できれいに韻を踏んでいる原文のスタイルを浪花節風の日本語に移し替えることに見事に成功している。さらには、「犰狳物語」は擬人化したアルマジロの独白でノルデスチ住民の宗教性と自然（旱魃）を描き、井伏鱒二の「山椒魚」よりも豊かな文学世界を展開している。いずれも、ノルデスチ（北東伯）の口承文学を身体化して日本語で叙述した成果である。

こうした特徴を勘案すれば、彼の文学は、「日本語表記によるブラジル文学」と称するのが妥当だろう、と考える次第だ。

こうした日系文学の枠を軽々と超越した文学世界を松井太郎が構築するようになるのは、実は、彼が50代になってからである。1936年、彼が19歳の時、父親が失業したことから一家でブラジルに移民し、サンパウロ州内陸部のマリリアで農業に従事、終戦直後の「カチ組マケ組」抗争の時代を生き抜いたものの、父親に勘当されたことから、モジ・ダス・クルーゼスへ転住、と苦労を重ねたが、息子たちがスーパー経営に成功したことで、ようやく隠居し、文学活動を始めることになる。いわば、定年後の作家転進だが、日本文学ばかりか世界やブラジルの文学全般にも親しんでいたとはいえ、こうした本格的な文学活動を展開し、90歳になっても新しい文学フロンティアを開拓していた“快挙”は、特筆に値する。

遅ればせながら、合掌。

2017年第二四半期のGDP成長率

9月1日，ブラジル地理統計院（IBGE）は，2017年第2四半期（4~6月）のGDP成長率を発表した。概要以下のとおり。

1．前期比

（1）本年第2四半期（4~6月）のGDP成長率は，前期比＋0.2%となり，2期連続でプラスを記録した。

（2）部門別では，農業は±0.0%，工業は▲0.5%，サービス業は＋0.6%となった。

（3）需要面では，家計消費（＋1.4%）が10期ぶりにプラスに転じた。政府消費（▲0.9%），総固定資本形成（▲0.7%）はマイナスを記録した。

2．前年同期比

（1）本年第2四半期（4~6月）のGDP成長率は，前年同期比で＋0.3%となり，13期ぶりにプラスに転じた。

（2）部門別では，農業は＋14.9%，工業は▲2.1%，サービス業は▲0.3%となった。

（3）需要面では，家計消費（＋0.7%）が10期ぶりにプラスに転じた。総固定資本形成（▲6.5%）は13期連続で下落したほか，政府消費（▲2.4%）も下落した。

3．その他

（1）4四半期累積（2016年7月～2017年6月）のGDP成長率は，前4四半期（2015年7月～2016年6月）比で▲1.4%となった。

（2）2017年第2四半期における投資の対GDP比率は15.5%で，前年同期の16.7%を下回った。貯蓄率は同15.8%で，前年同期の15.6%を上回った。

中銀の「インフレ報告書」発表

9月21日，ブラジル中銀は，インフレ報告書（四半期に一度公表）を発表し，2017年のインフレ率見通しを3.2%，2018年のインフレ率見通しを4.3%とした。

今回のインフレ報告書では，金融緩和サイクルの緩やかな終結を示唆している。

リオの観光推進計画（クリヴェーラ・リオ市長による寄稿）

9月27日付当地主要紙「オ・グローボ」はクリヴェーラ・リオ市長によるリオ市の観光推進計画である「Rio De Janeiro a Janeiro」（1月から1月のリオ）に関し，寄稿を掲載した。概要以下のとおり。

なお，同市長は，7月に発表したリオ市戦略計画（2017－2020年）において，リオ市内のイベント数増加等により，2020年までに年間観光客数（国内外）を20%増の290万人にするとの目標を掲げている。

1．リオ市は現在，様々な騒動の中にいるが，リオデジャネイロは依然として観光客を惹きつけている。観光省委託調査でもリオの有する高い潜在性が確認されている。今年8月15日から20日の間，我々の街を訪れた国内観光客1,000人に対するアンケート調査によると，95%がリオへの再訪の意向を示し，92%が友人や家族にリオへの旅行を推めると回答している。我々の街の治安は深刻な問題ということは事実である。しかし，同時に，主要なスポーツイベントの開催期間（FIFAコンフェデレーションズカップ，ワールドカップ及びオリンピック）は犯罪率が下落し，これまで長く経験しなかった程の平和が維持されたことも事実である。それでは，なぜカーニバルや大晦日のような大規模な行事の際も同様に犯罪率が低下しないのか。それは，治安体制の構造にあり，連邦政府が関与する行事には，地元の民，軍，市警察に加えて，国家治安軍，軍隊，連邦警察，連邦道路警察も動員されるからである。

2．今こそ，起業家，事業家，文化部門のプロデューサー及び様々な部門全てが一致団結するべき時である。この考えに基づき，私は，我々の街を同じく愛するロベルト・メディナ氏，ボニ氏，パウロ・マリーニョ氏，リカルド・アマラル氏，パウロ・プロタシオ氏のような事業家と会合を持ち，連邦政府に我々の案を提示するため，リオ市のイベントスケジュールについて議論した。このようにして，「Rio De Janeiro a Janeiro」は生まれた。更に，モレイラ・フランコ（大統領府事務総局）長官による熱心な働き掛けの下，観光省，ブラジル観光公社（Embratur），大統領府安全保障室，連邦貯蓄銀行（CAIXA），ブラジル銀行，ペトロブラスやその他政府機関からの支援が予定される。

自動車販売、好調に推移

9月の新車販売台数は19万9,200台と前年同月比24.5%と大幅に増加した。1―9月の累計新車販売台数は162万台で前年同期比7.8%増となっている。

こうした販売状況から、今年度の年間販売台数予想は220万台となり、前年比7.3%増になるだろうと見込まれている。

ちなみに、現在のメーカー別の市場シェアーをみると；

1）GM・・・・・・・18.2%
2）フィアット・・・・13%
3）ワーゲン・・・・・12%
4）ルノー・・・・・・10.6%
5）フォード・・・・・9.7%
6）現代・・・・・・・8.7%

となっており、ルノーの躍進が顕著である。

さらに中古車販売についても順調に推移しており、1～9月の累計中古車販売台数は822万台で前年同期比8.2%増となっている。

新刊書&新盤紹介

◆◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆◆

『遥かなるブラジル－昭和移民日記抄』（與島みつのり著、畑中雅子編）

コチア青年移民として1957年ブラジルに移住した著者は農業現場で奮闘するが農薬中毒で身体を壊してしまい、川魚漁師に転進した後、宝石ビジネスの世界で地歩を固めつつあったが、1991年病没する。享年54歳。著者が残した膨大な日記から、1978年~1990年の部分を抄録した本書は、あの時代のブラジル生活者による優れた記録であり、自己流川柳も付された日記文学としても秀悦。あの時代を知る者は共感なしには読み進めない。

（国書刊行会　2017年5月　277頁　1,500円＋税）

『数学文化』第28号

日本数学協会が発行する会報的雑誌（年２回発行）最新号に、岡野千明・斉藤良美「ブラジル珠算界のあゆみ」という貴重な論稿が掲載されている。これによれば、サンパウロ珠算学校の開校は1958年、ブラジル珠算連盟発足は1959年で、初代理事長を務めた加藤福太郎先生（1934-1988）がブラジル珠算教育の開拓者である。400名程度であった検定試験受験者は2016年には600名を超えたが、指導者の高齢化が問題となっている由だ。

（日本評論社　2017年８月　92頁　1,400円＋税）

『ラテンアメリカはどこへ行く』（後藤政子 / 山崎圭一編著）

21世紀におけるラテンアメリカの課題についての論稿集であるが、ブラジルについては、グローバル・バリューチェーンと社会的統合（小池洋一）、ブラジルの住宅政策（山崎圭一）、ラテンアメリカの経済動向との比較と「中所得国の罠」（田中祐二）、の３論文が収められている。格差の拡大、スラム街の暴力的膨張、開発による環境破壊、多民族共生など現代世界の共通課題を批判的視点から再考し、その原因と処方箋を探る手掛かりとなろう。

（ミネルヴァ書房 2017年5月 344頁 4,500円＋税）

◆◆◆◆◆◆ 新盤紹介 ◆◆◆◆◆◆

『FIZ UMA VIAGEM　ある旅をした』（ジョイス・モレーノ）

2014年が生誕百周年であったドリヴァル・カイミはバイーア音楽界の巨人であったが、幼少期からカイミを聞き馴染んでいたジョイスが「歌い始めた子供のころの自分に思いを馳せて、旅をした」。カイミの名曲やジョイスの新作を合わせて13曲収めた、このアルバムを聞くとなんとも気分はバイーアだ。ジョイスの心の旅に付き合って、「コパカバーナの土曜日」、「サウダージ・デ・イタポアウン」といったメロディーに耳を傾けては如何？

（ランブリングレコーズ　2017年7月　2,500円＋税）

『SUL / BRANCO スル / ブランコ 』（ルアナ・カルヴァーリョ）

ルアナはサンバの女王ベッチ・カルヴァーリョの娘だが、親の七光りなぞから全くフリーな音楽活動を展開中だ。このアルバムに収録された最初の曲はマンゲイラ讃歌であり、最後にはサンバ界の女性長老作家ドナ・イヴォニ・ララ（96歳！）が登場する。今や中堅ミュージシャンとなったペドロ・ルイスも作曲でコラボ参加しており、まさに“伝統的サンバ”と“ポストサンバ”が共存するスーパーアルバムに仕上がっている。

（P-VINE RECORDS　2017年９月　2,500円＋税）

!!「びっくり豆知識」!!

ブラジルに日本人の「拉致」を教えよう

戦後生まれにはピンとこないが、こういうのを日本にとっての「仮想敵国」というのだろう。北朝鮮のことである。ICBM（大陸間弾道ミサイル）発射実験や核実験を繰り返し、国連安保理の制裁決議も無視し続ける危険な国。それだけでも巨悪の名に値するが、日本は領土上空にミサイルを飛ばされ、さらには拉致被害を何度も受けている。

まずびっくりするのは、そんな国が世界のおよそ８割以上、164カ国と国交を結んでいることだ。1948年の建国以来、社会主義の小国として欧州、アフリカ、アジアの多くが特に熟慮することなく承認してきたのだろう。中でも北朝鮮の首都平壌に大使館を置き、親密な外交関係を維持している20数カ国の中に中南米のブラジルとキューバが入っている。逆に日本やアメリカのように「北」と国交のない国は36カ国しかない。

もうひとつのびっくりは「日本人拉致」という重大事件が世界で知られていないことである。ブラジルは社会主義国ともうまく付き合う多面外交を得意としているが、ひょっとすると「拉致」を詳しく知らないのではないか。

こんな話がある。昨年亡くなったキューバのフィデル・カストロ前国家評議会議長が03年に来日した際、時の小泉純一郎首相が会い、依頼をした。「北朝鮮が日本人拉致を認めた。解決に協力してほしい」と。サシの会談は75分という異例の長さになった。議事録はないから「言い回し」まではわからない。でもフィデルは「そんな話は初めて聞いた」と首をかしげていたという。

社会主義を標榜する北朝鮮とキューバは仲間だと思っていた小泉氏も周辺も驚いた。キューバも知らない秘話が世界に広がるわけはない。そんな「拉致」事件をトランプ米大統領が国連総会の場で明かした。Ｇ７首脳で初めてだったし、これは「北」への鉄槌になったはずだ。ブラジルのテメル大統領はこの演説を聞いていただろうか。もしもこれを聞いたら、普通のブラジル人なら怒るだろう。

中南米では今年９月になって「北容認派」のメキシコ、ペルー両政府が北朝鮮大使を「好ましからざる人物」として国外追放した。ブラジルがどうするか、をラテンアメリカの多くの国は注視している。最近英BBCが北朝鮮向けの放送を開始するというニュースを聞いた。狙いは不明だが、英国は「北容認派」のひとつだから、「もうあきらめろ」と説得してほしい。日米韓だけでなく、164カ国が圧力を結集しないとあの国は動かない。（W）

価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000円／月（税別）

CRONICA（クロニカ）

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000円／月（税別）

有限会社イスパニカ
〒107-0052
東京都港区赤坂2-2-19
アドレスビル
Tel. 03-5544-8335
Fax. 03-5544-8336
Email: hola@hispanica.org

通訳・翻訳、語学研修も行っております
イスパニカ で検索！

hispánica

日本ブラジル中央協会からのお知らせ

協会イベントのご案内

イベント参加のお申し込みは、協会HP専用フォームにてお願いします。

11/22　中前隆博 外務省 中南米局長 講演会
演　題：ブラジル日系社会について
[公益財団法人 海外日系人協会 共催]

日　時：2017年11月22日（水）14:00～15:30（13:30受付開始）
参加費：【個人会員】1,000円【法人会員】2,000円
【海外日系人協会 賛助会員】1,000円【非　会　員】3,000円
場　所：フォーリン・プレスセンター
住　所：千代田区内幸町２－２－１日本プレスセンター６階
アクセス：東京メトロ 日比谷線、丸ノ内線、千代田線、霞ヶ関駅C4番出口，都営三田線 内幸町A6番出口

12/6　二宮正人弁護士 講演会
演　題：ブラジル労働法改正について

日　時：2017年12月6日（水）14:00～15:30（13:30受付開始）
参加費：【個人会員】1,000円【法人会員】2,000円【非会員】3,000円
場　所：フォーリン・プレスセンター
住　所：千代田区内幸町２－２－１日本プレスセンター６階
アクセス：東京メトロ 日比谷線、丸ノ内線、千代田線、霞ヶ関駅C4番出口，都営三田線 内幸町A6番出口

11/27　ランチョン・ミーティング
講　師：日下野 良武 氏
（サンパウロ在住フリージャーナリスト、元サンパウロ新聞社専務）
演　題：ブラジル巷談（よもやま話）

日　時：2017年11月27日（月）12:00～14:00
参加費：【会員】3,000円【非会員】3,500円
場　所：シーボニア・メンズクラブ
住　所：千代田区内幸町2-1-4　日比谷中日ビル１F
アクセス：地下鉄「内幸町」駅下車2分、「霞ヶ関」駅下車2分

12/8　2017年末フェスタ
ブラジル音楽とアミーゴの楽しい夕べ

日　時：2017年12月8日（金）18:00～21:00（17:30～受付開始）
参加費：【男 性】7,500円　【女 性】6,500円
場　所：PARK SIDE TABLES
住　所：東京都千代田区紀尾井町3-2紀尾井町ビル2F
アクセス：東京メトロ有楽町線 麹町駅より徒歩３分
ブラジル音楽演奏：Cem Cruzeiro / 司会：榎戸教子・榎戸道子 姉妹

法人・個人　新規会員募集中

現会員数　法人会員118社　個人会員310名

皆様のご入会、心よりお待ちしております。

年会費（入会金は不要です）
法人会員　1口　20,000円（2口以上）
個人会員　1口　10,000円（1口以上）
お申し込みは、協会HP専用フォームにてお願いします。

日本ブラジル中央協会ウェブサイト
http://www.nipo-brasil.org

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。
広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。
事務局 E-mail : info@nipo-brasil.org

ブラジル赴任の前に
ビジネスで使えるポルトガル語を

ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia（ブレイジア）では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia（ブレイジア） 運営:**株式会社 漢和塾** 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716

お問い合わせは E-mail:**brasia@kanwajuku.com** HP:**http://brasia-j.com/**

BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
＋ ビュッフェ
¥5.400 (税抜き/tax not incl.)

ALL YOU CAN EAT | 食べ放題

予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅 徒歩2分 G M
C 赤坂駅 徒歩6分
N Y Z 永田町駅 徒歩6分

エミレーツ航空が、
南米を近くする。

エミレーツ航空は、南米3都市に毎日運航。ドバイ空港でお荷物の預け替えをしたり、チェックインカウンターにお立ち寄りいただく必要がなく、荷物は最終目的地で受け取るだけ。
ご到着まで快適にお過ごしいただき、リフレッシュして次のビジネスへ。ご予約は emirates.com/jp で。

Hello Tomorrow

Emirates

世界の鉄へ しんにってつすみきん

鐵（てつ）は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。
新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、
“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。
だからこそ私たちは、「鐵」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、
総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。

新日鐵住金